高・大・一般　漢字（楷書Ａ）

※楷書Ａ、Ｂは段級をとわず両方出品も可。

宮澤　鵞州

九成宮醴泉銘（欧陽詢）①

※落款（署名）には「雀人臨」と記しています。「雀人（雅号）」が臨書した、という意味になります。

大聖

――落款の記し方――

・臨書の場合は「○○臨」とします。
・他者の作った文・文章で、漢字のみの場合は「○○書」とします。
・自分の作った文・文章の場合は、「書」を省くことが多いです。
・右の「○○」には、自分の名（太郎・花子など）や雅号（雀人・清泉など）を記し、姓（鈴木・田中など）にはしません。

〈解説〉

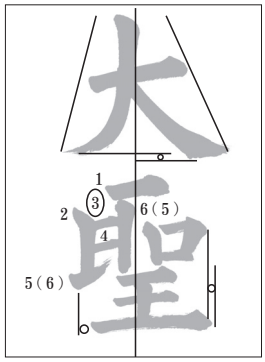
今号から三回にわたり唐時代の「九成宮醴泉銘」を採り上げます。「九成宮醴泉銘」は、唐代の欧陽詢の書で、貞観六年（632年）に建立された石碑です。隋時代の「仁寿宮」を唐代の太宗皇帝が別荘に改修し名を「九成宮」としました。ここに清い水が湧き出たことから太宗は吉兆であるとして、名臣の魏徵に撰文させ欧陽詢に揮毫させました。「醴泉」は、湧き水のことでこの碑を「九成宮醴泉銘」といいます。欧陽詢七十六歳の楷書碑で、その書は理知的で構築性に優れ「楷書の極則」として今日でも高く評価されています。

「**大聖**」は、「九成宮醴泉銘」の用筆と字形を学ぶために選びました。

「**大**」…横画の起筆は六十度の角度で鋭く入り、筆を立て切り込むように細く運筆します。左払いは、中心より左から書き出し上部の垂直部を長く突き出し、横画を過ぎた後から悠然と左に払います。右払いは、二画目が左寄りなので右下に長く書き全体の均衡を保ちます。右払いの収筆は厳しく短めに払います。

「**聖**」…単独の「耳」と異なり、一画目の横画のみ中心に位置づけて書きます。二画目の縦画は内側にえぐるような縦画で緊張感を表現します（これを「背勢」といいます）。筆順は図示したように五・六画目を縦画にするか横画にするか判別がつきかねますが、どちらでも構いません。「口」の一画目は縦画というより、内側に切り込むように右回転させます。この画だけで「口」形が厳しく鋭くなるのが不思議で、これも「背勢」の表現と思われます。「口」を部分にする漢字は多数あるので、背勢による「口」を習得しましょう。

※「九成宮醴泉銘」は細い線で書いているので、拡大しても骨格だけの細い線になります。したがって、臨書例では線にある程度の太さを出し、肉付けして謹厳で強靭な書風を目指しています。



高・大・一般　漢字仮名交じり書

青山　浩之

〈釈文〉 この道は　いつか　来た道

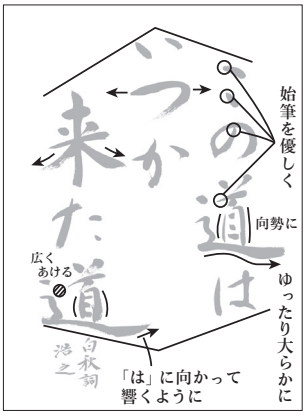
〈出典〉 北原白秋「この道」

孔子廟堂碑より

道

来

※出品の際は落款に○○書または○○かくと書くこと。



〈解説〉

題材は、北原白秋作詞、山田耕筰作曲、今も多くの人に慕われる日本の童謡「この道」の一節です。もとは１９２６年に『赤い鳥』に発表されたもので、翌年に曲がつけられました。２００６年には日本の歌百選にも選定されています。ゆったりとした曲調に、懐かしさや安らぎを感じる人も多いのではないでしょうか。書で表現する場合も、歌に合わせ、ゆったりとした運筆に穏やかさを感じる書風が適する題材だと思います。漢字の書の古典で言えば「孔子廟堂碑」のイメージです。「孔子廟堂碑」の書法を基に、仮名もそれに調和した書き方で表現してみましょう。

〈今月のポイント〉

・「孔子廟堂碑」の書法を漢字仮名交じりの書の表現に生かし、ゆったりとした穏やかな書風を目指す。

・大らかに見える構成を学ぶ。

〈学習上の留意点〉

「この道は」

・穏やかな雰囲気を出すため、「この」を抑え気味に書き始め、「道」でゆったりとした大らかさを演出。漢字も仮名も始筆は「孔子廟堂碑」の書法を意識して優しく打ち込み、「しんにょう」のようにゆったりと運筆する。

「いつか」

・少し高い位置から書き始め、目線を引き上げる。「つ」を大らかに。

「来た道」

・「孔子廟堂碑」を意識して、「来」「道」を横に拡がる結体で。一・二行目と高さを変えて、全体の構成を落ち着かせる。

※提出作品は、半紙を縦に使用。